

住吉大社御文庫蔵  
十市 遠忠 『住吉法樂百首』

前田智香  
八木意知男

はじめに

室町時代の和の武家歌人として名高い十市遠忠の生涯については、はやく井上宗雄氏の「十市遠忠について」（東京教育大学『国文学言語と文芸』50、大修館書店、昭和四二年一月）があり、また『中世歌壇史の研究 室町後期』（明治書院、昭和四七年）にも述べられている。そして、遠忠の和歌の主なるものは、群書類従13、続群書類従14下・15下、私家集大成7等に所収され、比較的容易に見る事が出来る。

しかし、これで遠忠の歌業の全貌が把握可能かというところではない。例えば「法樂五十首」「法樂三十首」等とあつても、実際には歌数が五十首なり三十首なりにおさまっていない場合が大半である。では、この場合どの様に整合させたのか、大層興味深い詳細は不明のままである。

かかる折柄、大阪市の住吉大社御文庫に『住吉法樂百首』なる十市遠忠の詠歌一冊が架蔵される事を知った。この一冊はすでに国文学研究資料館の調査もありマイクロ化もされてはいるが、未だその内容は必ずしも明らかにない。この度、

八木・前田が許され（平成十五年六月十八日付、住吉大社宮司真弓常忠）て翻刻するにあたり、些か内容についても考えることとした。

### 十市遠忠と住吉社

ところで、私家集大成7に所収の遠忠集I～Vが年次別詠藻であるとする、十市遠忠には人丸・八幡宮・東大寺八幡・聖廟・三輪社・春日社・高野大師・当城新宮住吉社・釜口長岳寺愛染堂・長谷寺・玉津島・三和田郷春日若宮・鞍馬寺・熊野・祇園・稻荷社・賀茂社等への法楽和歌が認められ、その中に住吉社への法楽和歌も含まれる。

十市遠忠が住吉社へ参詣した事は、次により明らかである。

住吉へ参詣せし事をおもひいてつゝ

御祓せし事はわすれす住の江や 宮ゐすゝしくきゝし松風

当座の御詠ときこえ候へく候、過去のしもしもふ  
たつ候、さしたるふしなく候

（遠忠I、一七一）

六月祓に 住吉へ昔年参詣せし事なと思出で

住の江や夕波すゝしはつくと なかめやるりてにも夏祓してかな

（遠忠III、七五）

昔住吉へ今日参詣之事思出で

われもみし河へすゝしき松かけの 御祓わすれぬすみよしの浜

（遠忠IV、一一六）

六月御祓に住吉へ昔参詣せし事を思出で

年へてもけふは忘す御祓かなせしすく思へは涼し住吉のはま

（遠忠V、二二六）

全てが同じ折を指しているとすれば、遠忠の住吉参詣は大永七年（一五二七）五月廿五日の出来事であったことになる。五月廿五日であれば、堺宿院頓宮での南祭と同じ所の解除であったのであろうか。「われもみし河へ」句は大和川を想起させる。そしてこの海浜での解除は、遠忠にとって忘れ得ぬ出来事となり、年毎に思い出されたのである。

### 十市遠忠の住吉社法楽和歌

十市遠忠は和歌の道に心を尽した武人である。故に住吉社への法楽を志すのは自然のことである。

#### 住吉井勝手両社勧請之時

年く／＼にみつはよつはの宮つくり 神のめくみもやとにつきせし

（遠忠Ⅱ、二二三）

と、勝手神社と共に住吉社が勧請されのも志の現われに他なるまい。天文六年（一五三七）中の詠藻を控える遠忠Ⅴに認められる次の歌群はその一つに他ならない。

住吉法楽三十一首内十六首

旧冬夢想在冠題者先帝  
百首御製内抜之、三月十二日  
始廿五日終功

な山早春

103 ．なみまよりさそや立覧すみの江の かすむむかひのあはち島山

か松残雪

104 かすめとも猶かけさえてしら雪の のこれる松は春としもなし

は静見花

105 花にのみむかふるほとは世中の ことしけきをも春は忘ぬ

け花慰老

106 けにや身の此春よりそしりぬへき老木の花は老木もさかりありとそは

み郭公何方

107 みておしみ立てそしたふ時鳥もいつこ いたち雲まの一二ゑの空さためていまのはつねきはや

108 みる月を鳴ねにしたふそなたとも十五 思ひさためぬ郭公哉は

の遠夕立

109 軒ちかき山かせ涼し夕立むら雲の をちかたのへの夕立そするの空

田家雁

110 にしなるや色こきいねに雁の音ほひきての ましるかりほの露の秋風そもれくる

た秋月添光くや公条卿

111 たか世より光も空にますかゝみ 月は秋とそかゝりそめむらけん

つ独惜月

112 月廿三のかけあかすそみつる我のみと 思へはたれかいるをおしまぬ

暁聞千鳥

113 わくらはに人はとひこてうら千とり かきねつれなきく公条卿在明の空

き雪中眺望

114 昨日みし霜をきかへて小篠原 一よのほとにふるの白雪しらの中

115 きゝすたつかたのゝみかり雪しらの中に ぶりぬる道をみるよともかな

み伝聞恋

116 みし人のなこりやそれと玉かつら かゝるを聞そ思ひみたるゝ

の尋在所恋

はある世も

117 あはれさそあるにもあらぬかけろふの をのゝ山かけとひやわひけん

のかれすむ人ありとて

118 後の世とおもひし人もかけろふの をのゝ山かけとひやわひけん

119 後題述懐二改之、廿首撰歌二入は身のいかなるつみに逢とても とはてはしらしかくす所を

立かへり公条卿

いかにすまのうきねを

よ古寺鍾

(一行分空白)

120 よしあしもなにはにつけて○かねのま声の つねならぬ世はとにもかくにも

こ述懐聞

121 ことのはの折につけては花かたみ もゝさてみるも色かやこそなき

寄神祇祝

122 ときはなるうらはの松の数くに めくみあれなとすみよしの神

右は、天文五年冬に住吉神の夢想を得て、翌天文六年三月十三日から廿五日にかけて詠んだ十六首であるという。全体が夢想の歌を一字ずつ頭に置字した三十一首企画であった故、半分ということになる。続群書類従14下所収『十市遠忠百首』中に「住吉法樂三十一首中」とあるが、これと一致する歌は一首もない。故に両者同一か否かは不明。

ところが、遠忠の住吉法樂歌は上以外に今一度認められる。天文二年中詠草を控える遠忠Ⅱにある次がそれである。これは「百首」とある故、当然、上の三十一首とは異なる。

去年住吉法楽百首中、道御不審之歌詠直候

嶺五月雨

135 五月雨はいくかの雲のふしのねに み雪をうつむ空のつれなさ

此百首の月歌に富士を詠候間、可有如何候哉

清書に載之  
富

136 さみたれの日数ふり行かひかねや さやにも見せぬさよの中山

137 つくはねの嶺ふりくらすみな河 みなから渚とさみたれの比

沼水(ママ)

138 かつみれは浅賀(ママ)の沼の枯葉まで 名もむつましくこほるしら波

遊女

清書に載之  
富

139 さためなく波の枕をかはしまや めくりあふともたれかたのまむ

洲鶴

道へ十首清撰内

140 子を思ふ霜夜もつよに霜そや奥津すのに かさねても鳴鶴の毛衣〇

道  
かさねてそ鳴と第五の字に置かへられ候へかし、如何

右六首は、天文元年（一五三二）に詠み、逍遙院堯空三条西実隆に添削を依頼した『住吉法楽百首』の詠み直しである。

しかしながら、これだけでは『住吉法楽百首』の実像はほとんど把握不可能と言わねばならない。そこで本稿で紹介するのは、この『住吉法楽百首』である。

### 十市遠忠『住吉法楽百首』

大阪の住吉大社御文庫蔵『住吉法楽百首』は、『住吉大社御文庫目録(国書漢籍)』に

住吉法楽百首 一冊(箱入)

特五五

十市遠忠詠 三条西公条点 自筆 ※明治七年一月西尾播吉奉納

とあるもので、井上宗雄氏が「住吉大社の目録によると同社にも蔵する由。」(前掲論文)とされるものである。享祿四年(一五三二)七月に物忌みの中で霊夢を蒙り、天文元年(一五三二)十月に詠み終えたものである。それであれば、『実隆公記』

○天文二年(一五三三)二月九日条

(遠忠) 十市詠草合点、調書状、論石 火箸遣之、副物名哥待便風也、

○天文二年四月十五日条

(補書)(宣賢) 清三位来、十市詠草書状到来、

○天文二年五月十一日条

(住吉) □ □ 法楽、(遠忠) 十市、(住吉) 勸進、清書之、

あたりがこれと関わる記述と考えられる。(注) この二月九日条に実隆より火箸を送られた事は、『遠忠Ⅱ』に

従 遣愚詠一帖下給時、火箸に付給て

161 おもふことかきつけ灰の手すさひは する人もなしあはれならずや

御返し

162 手すさひのかく一筆の玉章も 身にめつらしといくたひかみし面白候

何と哉覽、此御贈答如何存之間、如此詠しなから不進獻候、猶案し候て重而可得貴意候、

住吉大社御文庫蔵の十市遠忠『住吉法樂百首』は、全九十五首の姿で批点を請うたのであるが、遠忠Ⅱ 135～140により清書段階までに詠み加えられ歌数の整合が図られたと知れる。また、公条批点とのみ称されているが、上の遠忠Ⅱ 135～140によるかぎり実隆の批点もあったとしなければならない。公条名の記された点は一個所(29)に見えるのみである。

次に、住吉大社御文庫蔵十市遠忠『住吉法樂百首』は、続群書類従四一七『十市遠忠百番自歌合』と関わる。

自歌合

法樂百首

二番左「すみの江や」	1	三十番右「あつき日も」	34
八番左「春さむき」	5	三十一番右「ゆふまくれ」	31
十一番右「とふ人も」	12	三十二番右「秋かせも」	32
十七番左「春にあひて」	14	三十七番右「聞わひし」	41
十七番右「うつろはぬ」	15	三十八番左「さひしさは」	40
十九番右「鷗ゐる」	20	四十三番右「なかむれむ <small>マコ</small> 」	46
二十番左「心ある」	19	五十二番左「ふかき夜の」	52
二十一番左「故郷を」	22	五十四番右「せきてみん」	55
二十五番右「郭公」	25	五十五番左「いとはやも」	58
		五十六番左「さゆる夜の」	62

五十八番左「とはゝやな」 | 66  
 五十九番右「ふるまゝに」 | 67  
 六十五番右「思ひかね」 | 82  
 六十八番左「こよひ先」 | 77  
 七十番右「人はいさ」 | 76  
 七十一番右「消ねたゝ」 | 81

七十二番左「恨わひ」 | 84  
 九十三番右「たちぬはぬ」 | 89  
 九十五番右「法の舟」 | 93  
 九十七番左「あふき来ぬ」 | 94  
 百番右「難波津の」 | 95

以上三十首が当該『住吉法樂百首』中である。そして、この三十首は合点の存するものに限られている。しかも、実隆の添削が入った歌は、次の如くそれを受け入れたかたちで『自歌合』には採歌しているのが現実である。

変恋

81 消ねたゝか<sup>けし</sup>ハるな<sup>さ</sup>け八月草の

あたにうつろふ袖のうハ露

祈恋

82 おもひかねあひ<sup>た</sup>ハ又<sup>た</sup>わすれねと

二ミちかけていのる神かき

七十一番右 変恋

消ねたゝかけし情は月草の あたにうつろふそての上露

六十五番右 祈恋

思ひかねあひみすはた<sup>レ</sup>忘ねと 二みちかけていのる神かき

また、住吉大社御文庫蔵『住吉法楽百首』では、計三十七首に合点が認められ、この中の三十首は上に述べた通りであるが、残り七首も含めて続群書類従四一八『十市遠忠百五十番自歌合』にも採歌している。

百五十番自歌合

法楽百首

三番左「いつしかと」	— 2	六十二番右「露ふかき」	— 42
十一番左「槇の戸に」	— 6	六十七番右「色見えて」	— 47
十三番右「春かせに」	— 8	六十八番左「あふきみよ」	— 45
三十三番右「かけかすむ」	— 18	九十一番右「泉河」	— 53
三十四番左「なこりあれや」	— 17	百十二番右「大かたの」	— 71
三十八番右「夕月夜」	— 23	百三十番左「露時雨」	— 87
四十八番右「五月雨の」	— 遠忠Ⅱ 136	百三十番右「子をおもふ」	— 遠忠Ⅱ 140
五十番右「みるまゝに」	— 35	百四十五番右「さためなく」	— 遠忠Ⅱ 139

かかる現状を井上氏前掲論文が

私は、見当違いかもしれぬ「大まかな印象批評」に転ぜざるをえないのだが、通読した所（それは正統類従所収のものだけでもよい。未刊の詠草類としてそう違ったものではない）、当時のレベルを抜くものではない。

といわれるのに重ねることは易い。しかし、遠忠の歌業を知る事とは異なり、一つの企画作品としての法楽和歌の全体像なり、自歌合の成立の問題は別に考える必要がある。

### おわりに

要するに住吉大社御文庫蔵十市遠忠『住吉法楽百首』は、住吉社へ遠忠が奉納した『百首』そのものではない。実際には点を受け詠み直しをし、清書をして奉納したと思量される。しかし、奉納された現品が知られ得ない以上、これをもつて推し量ることになろう。その資料を提供するものである。

なお、前掲井上氏論文によれば尊経閣文庫の『歌書数種』にこの『住吉法楽百首』を備う由であるが、ここではそれはふれない。あくまでも住吉大社架蔵の『住吉法楽百首』の立場による故のことで他意はない。

### 注

『実隆公記』中の遠忠関係記事としては次の如きが拾える。

○享祿二年（一五二九）十一月十二日条

(補書)  
内山有書状、十市兵部少輔遠忠哥合一卷送之、油煙卅丁進之、

○享祿三年（一五三〇）正月八日条

十市哥合付勝負、書状遣内山、遣万里小路了、

○享祿五年（一五三二）正月八日条

今日十市——遠忠(遠忠)百首并多社五十首、春日社卅首等詠草一覽了、(合点)書詞了、

○享祿五年（一五三二）正月十一日条

十市遠忠哥合点了、

○享祿五年（一五三二）正月十七日条

清三位来、十市詠哥一帖合点渡遣之、

○享祿五年（一五三二）二月十一日条

清三位入道来、十市兵部少輔先日礼太刀（二）腰・鳥目参百疋送之、遣状於清三位謝遣了、詠草一帖又送之、先預置者也、

○天文二年（一五三三）二月九日条

十市詠草合点、調書状、火箸遣之、副物名哥待便風也、

○天文二年（一五三三）四月十五日条

清三位来、十市詠草書状到来、

○天文二年（一五三三）五月十一日条

□□法樂、（住吉）勤進、清書之、

○天文二年（一五三三）七月廿五日条

十市兵部少輔自哥百番哥合判詞懇望、（遠忠）清三位  
伝達、

○天文三年（一五三四）閏正月廿四日条

十市書状年始、到来、油煙十疋送之、和哥一帋先度申遣哥共詠直令見之、則勘付之、先以一帋愚存申遣之、返事（近）□日可遣之由申

送了、

○天文三年（一五三四）三月廿四日条

十市兵部少輔有状、（遠忠）□□判（哥合）□詠草数多送之、三百疋送之、返事調遣之、彼内□詠草一卷 合点事申之、

○天文五年（一五三六）正月廿一日条

十市有状、油煙十疋送之、（遠忠）

〔翻刻〕

住吉大社御文庫蔵十市遠忠『住吉法楽百首』の翻刻は次の要領による。

- (1) 書誌は故意に記さない。
- (2) 字詰は原のママを心掛けたが、歌頭に1〜95の整理番号を付した。
- (3) 漢字は原則として現在通行字体に改めた。
- (4) カタカナはそのまま残した。
- (5) 点は大略原の位置に始まる様心掛けた。

住吉法楽百首

春二十首

山早春

- 1 1 すみのえや神代の春も波まより  
かすミそむらんあハちしま山
- 2 2 いっしかと波路しつけきすミの江に

春日うつろふむこの山かけ

浦霞

- 3 あさなゆふなあかぬミるめハ伊勢の海の  
なミ路かすめる春の空かな

摘若菜

- 4 春の野に袖うちはへて松かけの  
わかなに千世をつミやそへまし

雪中鶯

- 5 春さむきそのふの竹をねくらにて  
雪にこもれるうくひすの声

戸外梅

- 6 槇のとに春の嵐のさそひきて  
むめかゝにほふ明かたの空

夜梅

- 7 かすむ夜の月も色香にもりくるや  
軒はの梅の花のしたかけ

池柳

- 8 春風にちりなき池のミきハをも

はらふとそみる岸の青柳

野春雨

9 たひ枕日もゆふ山にたかしまや

かち野にかすむ春雨の空

帰鴈幽

10 立わかれかすむそなたに行鴈の

こしちの春やミネのしら雲

花洛春月

11 なかめやる花のミやこの山のはに

にほふハかりの春の夜の月

独待花

12 とふ人もあらしミ山の春の日に

ひとりや花をまつとの内

遠尋花

13 はるくときつなれぬるみよし野

よし野の花の比もへにけり

花慰老

14 春にあひてふりぬる身をも忘るらん

なれも老木の花のしら雪

花漸散

15 うつろはぬ比とミつも露ハかり

ちるたにおしき花のしたかせ

名所春曙

16 言葉もなきたる波にあげほの

和哥の浦半の春ハわすれし

庭堇菜

17 名残あれや野と成てたにすみれさく

庭もまかきも春のふる郷

沢雲雀

18 かけかすむ沢辺の水には木々の

あるにもあらてひはりたつ空

岸款冬

19 心ある川おさなれや山吹の

花のかけゆく岸の柴舟

江藤

20 鷗るる水のみとりも春ふかく

藤江にかゝる花のしら波

三月尽

21 ゆく春をしたふもあやな花鳥の  
色音はしハし世に残るとも

夏十五首

旅首夏

22 ふる郷を思ひいつれはかすみたつ  
日かすものうき枕かへかな

岡卯花

23 夕月夜猶かけみえて岡のへの  
さとのかきねにのこるうの花

郭公声遅

24 此ころもなくねハをそき五月雨の  
やますまたるゝほとゝきす哉

雲外時鳥

25 ほとゝきすやとりやいかに夕は山  
すそ野の雲にかゝる一二ゑ

郭公稀

26 まれにたにいつかハとひし草のとの  
しけきこゑなき山ほとゝきす

採早苗

27 さなへとるいとまもなミの袖かけて  
田子のもすそやほす空もなき

浜五月雨

28 みくまのゝ浦のはまゆふ朽ぬへし  
日かすかさなるさみたれの比

嶺五月雨

29 そことなくさミたれそめて山鳥の  
尾上へたてぬミねの松原

おのへ嶺おなし事欵 公條

里盧橘

30 たちはなの花ちるさとの夕風に  
おりたかへたる雪やふるらし

夏草滋

31 夕暮<sup>まぐ</sup>や草のしけミを分くれハ

あきかせかちに露のした道

瀧下螢

32 秋かせも雲ちぢるにちかき清瀧の

岩波たかく行ほたるかな

嶋瞿麦

33 あま人も色ある袖やなてしこの

はなのまかきの嶋にミゆらん

船納涼

34 あつき日も夕になれハ舟さして

川辺すゝしく夜をふかしつる

村夕立

35 みるまゝに照日へたつるむら雲も

さとわけて行夕たちの空

社夏祓

36 河やしる波のしらゆふ吹風の

しのおりかけみそきすらしも

行路初秋

37 玉ほこの道行袖にをく露も

身にさむからん秋は来にけり

織女後朝

38 あまの川ほしの契もしら波の

たちへたてつゝ明ぬこの夜ハ

故郷萩

39 たか世にかきてもミつらんま萩さく

はなのにしきのふる郷の秋

閑庭薄

40 さひしさはさそな小花の袖のうへかうたに

露もへたてぬ庭の蓬生

寝覚萩風

41 聞わひし夕のうさをそよさらに

ね覚におきの上かせそふく

叢露

42 露ふかき床の山かせはらふ夜の

草むらことにうつらなくなり

秋二十首

海霧

43 秋さむみ明ゆくなミのうすくこく  
ゑしまの松ハ霧たちわたる

田家鹿

44 もる人ハいかゝ聞らし秋の田に  
をしかなく夜のいねかての空

柚月

45 あふきみよわかたつ柚に秋をへて  
をひえのミねにあり明の月

関月

46 なかむるに秋もうき世の関の戸を  
いてやといそく月のかけ哉

林月

47 色みえてはやしにしけき言葉も  
月のためとや秋は成らん

浪上月

48 ふしのねの雪もうつろふ清見かた  
月なをさゆる浪の上のかけ

浅茅生月

49 秋ふくるあさちの露にうつりきて  
すそ野色そふミねの月影

夕初鴈

50 春は又かへる夕の空にミン  
そをたにちきれ秋の鴈金

聞擣衣

51 くり返し遠山さとにうつころも  
夜さむしらるゝしつのをた巻

雨後虫

52 ふかき夜のまかきにかゝる秋の雨の  
又ふりいつるすゝむしの声

渡紅葉

53 泉川ちらぬもみちの木すゑをも  
わたるはゝそのもりのしたかけ

隣紅葉

54 色ふかくみえても今ハ中かきを  
へたてすかゝるつたの紅葉ゝ

残菊

55 長月せきてみんやうつろひのこる山かけの

にほひもふかき菊のしたみつ

泊暮秋

56 そなたにやいまかへり行からとまり

人の国まで秋をしたはん

冬十五首

森初冬

57 木からしハけふ吹そめつ秋にたに

いく田のもりハとはれし物を

時雨知時

58 いとはやもミなれぬ雲やしからきの

とやましくるゝ冬を告らん

河時雨

59 神な月いるまもなミの名取河

しくれにくちね瀬々の埋木

橋落葉

60 はらひ来てむへ山かせに暮わたる

まつのたなはし散木のはかな

籬落葉

61 木からしやまかきにのこる露霜の

後ほもみちをさそひをく覧

篠霜

62 さゆる夜のほともしられて出る日に

霜こそこのれ道の篠原

閨霰

63 あらし吹ねやの板まをもる月の

かけよりもちる玉あられかな

沼氷

64 かつみれはあさかのぬまのなかきねも

あやめわかれすこほりぬにけり

竹雪

65 たのましやよのまハかくてなひきつゝ

折へくもあらぬ雪のなよ竹

原雪

66 与ハヤなみかきかハらのしら雪に

ふるさといと冬さそなこもるらん

深雪

67 ふるまゝに松の嵐のたえし夜を

おもへハけさの雪おれのこゑ

湖水鳥

68 ふせの海やうきねさためぬ水鳥の

ありそのかよひあらしたつよハ

湊千鳥

69 暮わたるゆらのミなどの夕波に

紀のうミとをくたつ千鳥哉

炭竈煙

70 年さむき雪に吹まく炭かまの

けふりもいとゞしろき山かせ

歳暮近

71 大かたの世のことわさもくる春を

ひとつにいそくとしの暮かな

恋十五首

初恋

72 思ひ入すゑもはるけししら雲の

かゝりそめぬる恋の山路に

忍恋

73 いかにせん思ひミたるゝみちのくの

しのふあまりにうらかせそ吹

聞恋

74 あさハかに思ひもやせん人つてに

きくよりやかて恋しといはゞ

見恋

75 春の花秋の月ともななめわひ

あかぬこゝろに恋やまかせん

契恋

76 人はいさわかこゝろさへしら糸の

あひおもふともたのミかたしな

逢恋

77 今夜まつおほつかなくも思ふこと

いはてそたゝに新まくらせん

恨恋

78 とはれねハ袖のなみたの浮もなく

うらむらさきのくたけわひつゝ

増恋

79 我こひハますけかるてふ池ミつの

ふかき思ひはいひもはるけし

顯恋

80 いまハゝやそめしこゝろの夕時雨

ミネのもみちの色にいつらむ

変恋

81 消ねたゝかハるなけし歎さけ八月草の

あたにうつろふ袖のうハ露

祈恋

82 おもひかねあひミスハ又たゝ歎わすれねと

二ミちかけていのる神かき

隠恋

83 しれかしなつゐにハみえしことのはを

まきのはしらにかへすためしも

厭恋

84 うらミわひいとふもなとかにくからて

猶こりすまにしたひきぬらん

別恋

85 さらにぬたにうき別路のとりくくに

おとろかしたる鐘のこゑ哉

絶恋

86 いまは世におもふかひなし岩橋の

たえにし中にのこる恋路よ

雑十五首

洞松

87 露しくれもみちのほらのミネの松

そめぬ色まで秋のひとしほ

洲鷗

88 朝日影つはさしほれて沖津すに

霜夜やさむきまつの友鷗

松の友鷗と終の句  
聞なれぬやうにも有候

巖苔

98 たちぬはぬ人のためしも欽やきつらん雲水の

ふかきいはほの苔のころもハ

釣漁

90 まなへ猶つりの翁の世かたりに

もろこし舟もかへることの葉

狩獵

91 かりにてもつみやハあらんよの中を

おさめん君かえ物なりせは

遊女

92 かれねた遊女ハ寺水辺を本ニ詠ならハし候欽野上のさとの草枕

ゆふへさためぬ露のかことハ

釈教

93 法の舟さしてわたらんしるへにや

ほとけの御名の数をつむらん

神祇

94 あふき来ぬ身にむつましく住吉の

神のまほりもも世々の契と  
を欽

祝言

95 難波津の流をくみておさめしる

御代にあつめん大和ことの葉

僻点四十二首

右百首者去七月物忌之比蒙靈夢

務禮之間任神慮奉詠之

住吉  
文庫

(京都女子大学大学院文学研究科生)

(京都女子大学短期大学部教授)